

気候変動リスクに対応する株式運用の変化

内 山 雅 浩 CMA

目 次

- | | |
|---------------------------------|----------------------|
| 1. 気候変動のリスクと機会—ポートフォリオ運用における対応— | 4. 投資プロセスへのインテグレーション |
| 2. 気候変動によるリスクの認識と測定 | 5. エンゲージメント |
| 3. ポートフォリオのカーボンフットプリント削減 | 6. 利害関係者への報告 |
| | 7. 投資家にとっての課題 |
| | 8. 結びにかえて |

気候変動リスクが企業のビジネスや業績に与える影響は、広範かつ大規模なものになるだろう。投資家は低炭素経済への移行に伴うリスクを、カーボンフットプリント削減やインテグレーションを通じて軽減するか、もしくは気候変動ソリューションへの投資を通じて機会を捉えることになるだろう。さらに、1.5°C目標の達成を目指すパリ協定適合戦略も登場している。排出量データの入手可能性や品質などの課題点もあるが、気候変動リスクの株式運用への取り込みは今後も進展するものと考ええる。

1. 気候変動のリスクと機会—ポートフォリオ運用における対応—

株式投資では、主に社会的責任投資（SRI）を通じて企業が環境へ及ぼす影響が考慮されてきた。現在、気候変動は世界的な喫緊の課題と認識されている。株式運用ではネガティブ・スクリーニング、気候変動ティルト、または／およびインテグレーションの三つの方法でこの課題に対応し始めている。

経済的な文脈では、気候変動には、①物理的リスクと、②移行リスクと機会、の二つの側面がある（図表1）。物理的リスクとは、自然災害や水資源の変化による財務上の影響を指し、不動産や運輸などインフラ関連企業と損害保険業に影響を与えるだけでなく、サプライチェーンを通じ間接的にもすべての企業に影響を与える可能性がある。

低炭素経済への移行により、企業は前例のないリスクに直面するだろう。地域に関係なく、ほぼ



内山 雅浩（うちやま まさひろ）

ゴールドマン・サックス・アセット・マネジメント(株) マネージング・ディレクター 計量運用部長。1997年入社後、業務部、運用分析部でパフォーマンス分析やリスク管理業務を担当。2003年に計量株式運用部に異動し、日本株式計量アクティブ運用に携わり、2012年より現職。日本および外国株式計量アクティブ運用、スマートベータ運用、リキッド・オルタナティブ運用のプロダクト・マネジメントに従事。